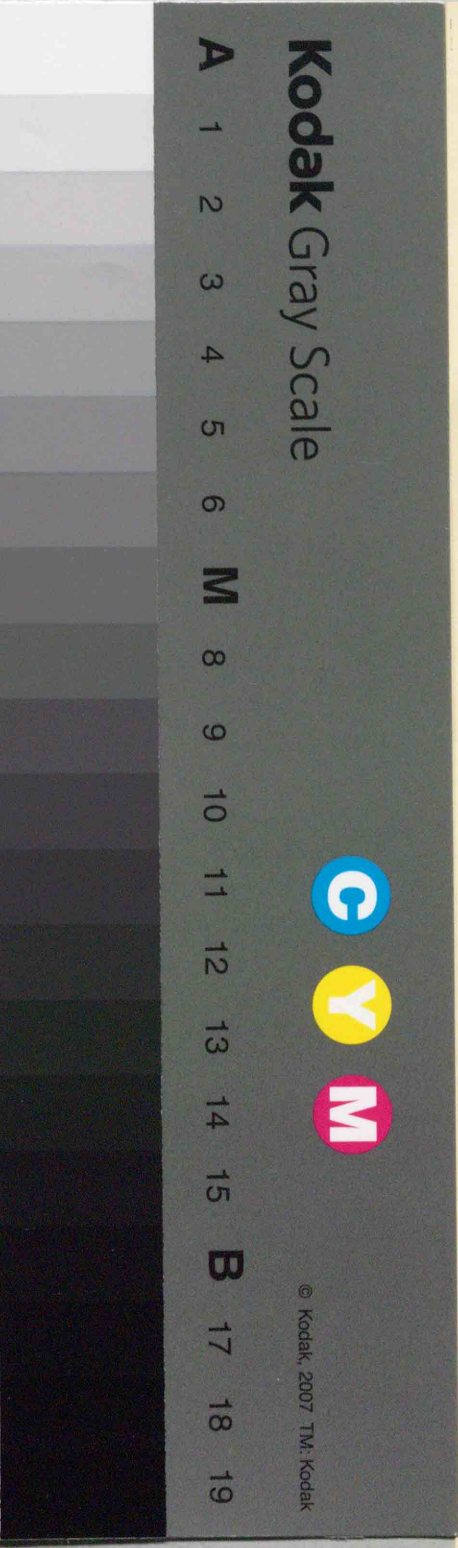
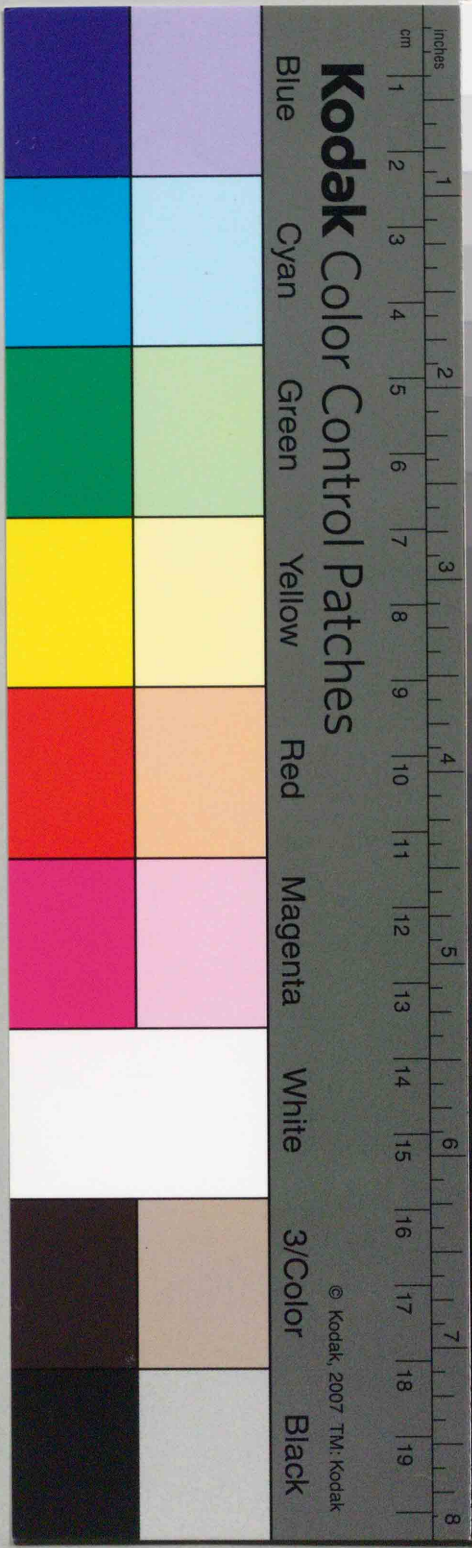
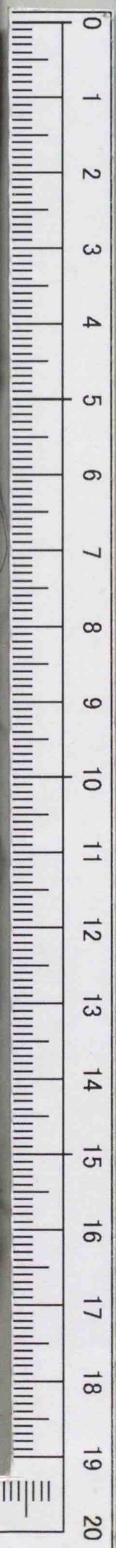


教科書文庫
4
110
31-1913
2000302710



40448

教科書文庫

4
110
31-1913
2000-0 23786

200030
2710



教科書文庫

4

110

31-1913

2000302710

資料室

3751
Mo 14



尋常小學修身書卷四

文部省

兒童用

広島大学図書

2000302710



廣島大學
圖書印



目録

第一	明治天皇	一
第二	能久親王	三
第三	忠君愛國	五
第四	靖國神社	七
第五	志を立てよ	九
第六	職務に勉勵せよ	十
第七	皇室を尊べ	十二
第八	孝行	十四
第九	兄弟	十六
第十	召使	十八
第十一	身體	二十
第十二	自立自營	二十二
第十三	自立自營 (つづき)	二十四
第十四	志を堅くせよ	二十六
第十五	知識をひろめよ	二十八
第十六	迷信を避けよ	三十
第十七	克己	三十二
第十八	禮儀	三十四
第十九	生き物をあはれめ	三十五
第二十	博愛	三十七
第二十一	國旗	三十九
第二十二	祝日大祭日	四十
第二十三	法令を重んぜよ	四十二
第二十四	公益	四十四
第二十五	人の名譽を重んぜよ	四十六
第二十六	人は萬物の長	四十八
第二十七	よい日本人	四十九

教育ニ關スル勅語

朕チン惟オモフニ我ワカ皇祖クワウソノクワウソウクニ皇宗クニ國クニヲ肇ハジムルコト宏遠クワウエンニ
德トクヲ樹ツクツルコト深厚シンコウナリ我ワカ臣民シンミン克キョクク忠チュウニ克キョク
ク孝カウニ億兆オクテウヨヨ心シンヲ一イツニシテ世ヨ々ヨ厥ソノノ美ビヲ濟ナセル
ハ此コレ我ワカ國體コクタイノ精華セイカワニシテ教育ケウイクノ淵源エンゲン亦マタ實ジツ
ニ此ココニ存ソンス爾ナチ臣民シンミン父母フボニ孝カウニ兄弟ケイテイニ友イウニ夫婦フフフ
相和アヒシ朋友ホウイウ相信アヒシンシ恭儉キョウケン己オノレヲ持ヂシ博愛ハクアイ衆シュウニ及オヨ
ホシ學ガクヲ修ユサメ業ゲフヲ習ナラヒ以モツテ智能チノウヲ啓發ケイハツシ德器トクキ
ヲ成就ジヤウジユシ進スステ公益コウエキヲ廣ヒロメ世務セイムヲ開ヒラキ常ツネニ國憲コクケン
ヲ重オモシ國法コクハフニ遵シタガヒ一旦イツタン緩急クワンキヤクアレハ義勇ギユウ公コウニ奉ホウ
シ以モツテ天壤テンジャウ無窮ムキウノ皇運クワウウンヲ扶翼フオクスヘシ是カクノ如ゴトキ
ハ獨ヒトリ朕チン力忠良チカラリヨウノ臣民シンミンタルノミナラス又以マタ以モツテ
爾祖ナチソセン先センノ遺風キフウヲ顯彰ケンシヤウスルニ足タラン
斯コノ道ミチハ實ジツニ我ワカ皇祖クワウソノクワウソウ皇宗クニノ遺訓キケンニシテ子孫シソン
臣民シンミンノ俱トモニ遵守ジュンシュスヘキ所トコロ之コレヲ古今ココンニ通ツトシテ謬アヤマ
ラス之コレヲ中外チウガイニ施ホドシテ恃モトラス朕爾チンナチ臣民シンミント俱トモニ
拳ケン々フク服膺フクヨウシテ咸ミナ其德ソノトクヲ一イツニセンコトヲ庶幾ソコナフ

明治二十三年十月三十日

御名 御璽



第一 明治天皇

明治十一年明治天皇
は北國御巡幸の時新
潟縣で目のわるいも
のが多いのをごらん
あそばされ治療のた
めに御てもと金を下
されました。二十三年
愛知縣に大演習のあ



つた時、天皇ははげしい雨のふるのに御づきんもめされずに、兵たいのはたらきをごらんになりました。
明治二十七八年のい
くさの時、天皇は大本
營を廣島へ御進めに
なりました。その時の御座所はそまつなせ

いやうづくりの一室でありました。朝早くから夜おそくまで御ぐんぶくのままでいろいろおさしづあそばされました。又天皇は災難にかかった人民を度度おすくひになりました。たが、三十年にも四十四年にも貧民救済のため、多くの御てもと金を下されました。

第二 能久親王

清國が臺灣を我が國にゆづつた時、臺灣に居つた清國の者が、なほ我が國にてむかひまし

た。能久親王

川北宮

はこれを御せいはつになり

ましたが、兵士とともに
に大そう御なんぎを
なさつたけれども、少
しもおいとひになり
ませんでした。

その後、親王は御病氣
におかかりになりま
したので、ぐんいは、お



とどまりになつて御やうじやうあそばされ
るやうに申し上げました。親王は「我が身のた
めに國の大事をおろそかにすることは出来
ぬ。」とおほせられ、かごに乗つて御進みになり
ました。

親王はかやうに國のために御つくしになり
ましたが、御病氣が重くなつて、つひにおかく
れになりました。

第三 忠君愛國

明治十年熊本の城が賊軍のためにかこまれまし
た。その時城を守つてゐた谷少將は城の中
のやうすを遠くのくわんぐんに知らせよう
と思ひ、その使を谷村計介けいけいにいひつけました。
計介は身にすすをぬりこみ、着物をかへ、夜に



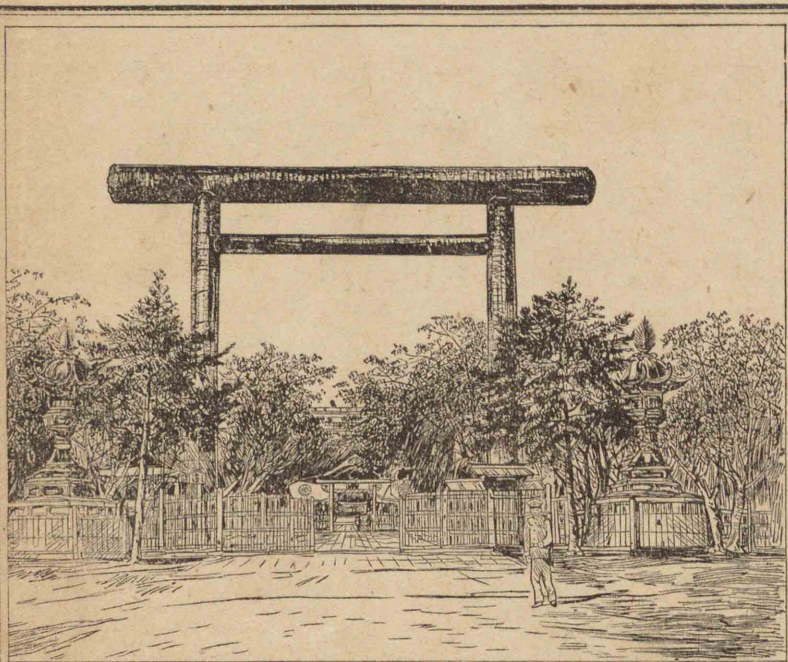
まぎれて城を出ました途中とちゆうで賊のため二度もとらへられ、いろいろなんぎな目にあひ
ました。が、とうとうくわんぐんの本營に行着
いて、しゆびよくその使をはたしました。

第四 靖國神社やまぐにじんじや

靖國神社は東京の九段坂の上にあります。此
の社には國のために死んだ人人をまつつて
あります。春と秋との祭日には、ちよくしをつ
かはされ、臨時大祭りんじだいさいには天皇皇后兩陛下の御

じしんに御さんはいになることでもあります。

忠臣義士のため
にこのやうにねんごろな
お祭をするのは、天皇
陛下のおぼしめしに
よるのであります。わ
れらは陛下の御めぐ
みの深いことを思ひ、
ここにまつつてある



尋修四

人人にならつて、國のため君のためにつくさ
なければなりません。

第五 志を立てよ

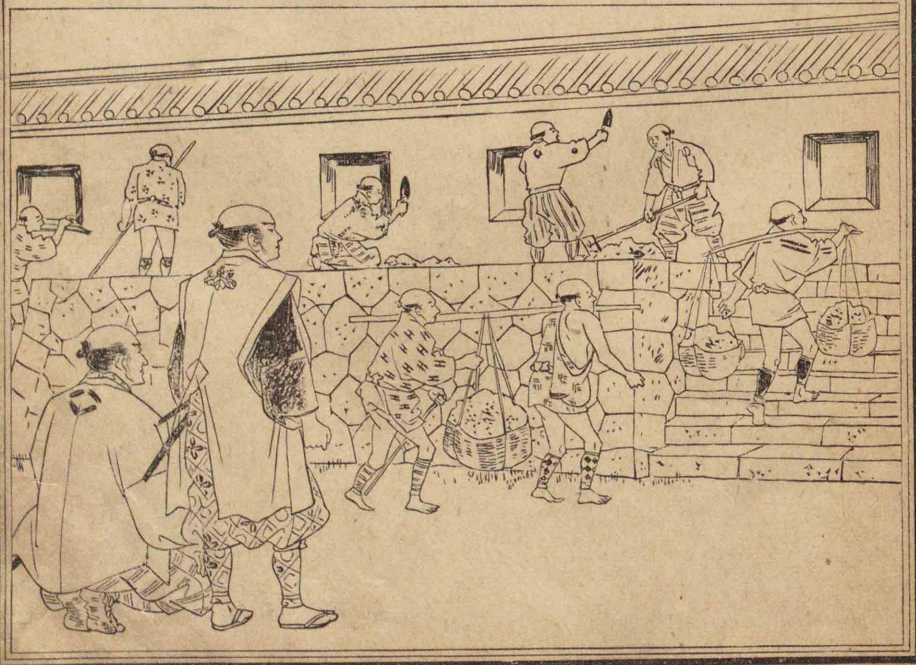
豊臣秀吉は尾張のまづしい農家の子で、八歳
の時父にわかれましました。秀吉は小さい時から
りつばな人にならうと志を立ててゐました
が、十六歳の時ただ一人遠江へ行つて、松下加
兵衛といふ武士に仕へました。秀吉は主人の
ためによくはたらいで、だんだん引立てられ

ましたが、仲間の者にそねまれたので、ひまを
もらつて尾張へかへりました。
その後、秀吉は織田おだ信長のぶなががえらい大將である
といふことを聞いて、つてをもとめて信長に
仕へました。

第六 職務しよくむに勉勵べんれいせよ

秀吉は信長に仕へてからも、人にすぐれてよ
くはたらきました。そのころ木下藤吉郎秀吉
と名のつてゐましたが、ある日信長が敵を攻

めるため、夜の明けな
いうちに、城を出よう
とした時、秀吉はただ
一人馬に乗つて待つ
てゐました。
ある年城のへいが百
間ばかりくづれまし
た。信長はけらいにい
ひつけてふしんをさ

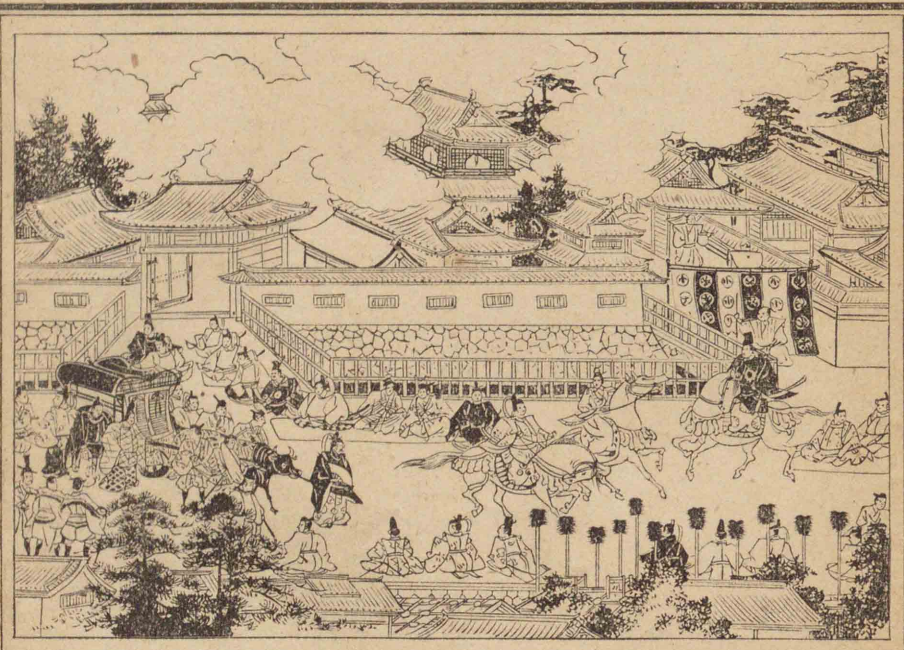


三十一
三十一
三十一

せましたが、二十日ほどたつてもはかどりま
せんので、あらためて秀吉にその役をいひつ
けました。秀吉は人夫をいそがせて、あくる日
にそれをしあげました。秀吉はこんな仕事
にはげみましましたから、次第に重く用ひられま
した。

第七 皇室を尊たうとべ

秀吉は信長のなくなつた後、国内を平げ、おひ
おひ高いくらゐにのぼりました。そのころよ



の中がみだれてゐた
ために、皇室は大そ
う御不自由がちであ
らせられたので、秀
吉は力をつくして皇
室の御ためをはかり
ました。

秀吉は京都にやしき
をかまへて居りまし

たが、ある年そのやしきに天皇の行幸ぎやうかうを御願ひ申しました。御道すぢには多くの人人が拜はい観かんしてゐて、中にはこの太平のありさまに感じて涙を流してよろこんだ者もありました。この時秀吉は大名だいみやうたちに皇室を尊ぶことを天皇の御前でちかはせました。京都の豊國神社は秀吉をまつつてある社であります。

第八 孝行

昔播磨はりまにおふさといふ孝行な女がありましたし

た。家が貧しいため、八歳の時から、子もりなどにやとはれて、暮しをたすけました。又父がざうりやわらぢをつくるそばで、わらぢをうつて手つだひました。十一歳の時から、ぼうこうにでましたが、主人からいただいた物は父母におくりました。又ひまがあれば主人の



ゆるしを受けて家にかへり、ねんごろに両親をなぐさめいたはりました。

おふさはかやうに親を大切にしたので、役所から、はうびをいただききました。

孝ハ親ヲ安ンズルヨリ大イナルハナシ。

第九 兄弟

昔兄弟二人がでんぢのあらそひをして、役所にうつたへ、さいばんを願ひました。泉八右衛門いづみはちゑといふ役人は、そのさいばんをするために、



二人を自分の家へよびよせ、せまい一室の中で待たせておきました。

二人は初ははなれてゐて、話もしなかつたが、長い間待つてゐるうちに、だんだん一つの火ばちによつて手をあぶり、たがひに話をするやうになりました。

そのうちに小さい時、父母のそばで仲よく遊んだことなどを思ひ出し、今さらこんなあらそひをしたことをこうくわいして、仲直りをしました。その後二人は仲のよい兄弟になりました。

兄弟ハ兩手ノ如シ。

第十 召使

おつなは十五歳の時、子もりぼうこうに出ました。ある日主人の子供をおぶつて遊んでる

ると、一匹の犬が来て、おつなにかみつきました。おつなはおどろいて、にげようと思いました。が、にげるひまがなかつたので、おぶつてゐた子供をおろし、自分がその上にうつぶしになつて子供をかばひました。犬ははげしくとびかかつて、おつなにくひつき、多くのきずをおはせましたが、おつなは子供をかばつて少しも動きませんでした。そのうちに人人がかけつけて犬を打ちこる

し、おつなをかいほうして主人の家にかへら
せました。子供にはけががなかつたが、おつな
のきずは大へんに重くて、そのために、とうと
う死にました。之を聞いた人人はいづれも感
心して、おつなのためにせきひを立てました。

第十一 身體しんたい

伴信友ばんのぶともは朝起きた時と、夜ねる時には、いつて
も姿勢しせいを正しくしてすわり、三四十ぺんもし
んこきふをし、又毎朝つめたい水で頭をひや



年をとつても丈夫で、たくさんの本をあらは
すことが出来ました。

我等はつねに姿勢に氣をつけ、運動を怠らず、着物はせいけつにし、ねむりや食事はきそく正しくしなければなりません。又からだにかを付けておいたり、うす暗い所で物を見たりなどしてはなりません。

第十二 自立自營じりつじえい

高田善右衛門たかたぜんゑもんは十七歳の時自分ではたらいて家をおこさうと思ひ立ちました。父からわづかの金をもらひ、それをもとでにしてとう

しんとかさを買入れ、遠い所まで商賣にでかけました。

そこには山が多くて道がけはしかつたので、大きな荷物をかついで通るには大それたなんぎでありました。善右衛



門は苦しい思をしていく度もけはしい山坂をこえました。又時時さびしい野原を通つたこともありました。このやうになんぎをして村村をまはつてあるき、雨が降つても、風が吹いても、休まずに、何年もはたらいたので、わづかのもとで多くの利益をえました。

第十三 自立自營 (つづき)

善右衛門はその後吳服ごふくをしいれて賣りにあ
るきました。いつも正直で、けんやくで、商賣に

勉強しましたから、つばな商人になりました。

ある時善右衛門は商賣の荷物を持たないで、ある宿屋にとまりました。知合の下女が出て来て、「今日はおつれがございせんか」といひました。善右衛門はふしぎに思つて、「いつも一人で来るのに、おつれとは誰のことですか」とたづねましたら、下女が、「それはてんびんぼうのことでございます」と云ひました。

善右衛門はつねに自分の子供に「自分が家をおこすことの出来たのは、精出してはたらいて、けんやくを守り、又正直にしてむりな利をむさぼらなかつたからである。」といつてきかせました。

第十四 志を堅くせよ かた

イギリスのジェンナーはふとした事から、種痘しゅとうのことを思ひ着きました。人に笑はれても、少しもかまはずに、いろいろとくふうをこらし、



二十三年もかかつて、とうとう、そのしかたを發明し、まづ自分の子にうゑてみた上、書物に書いて世間の人に知らせました。

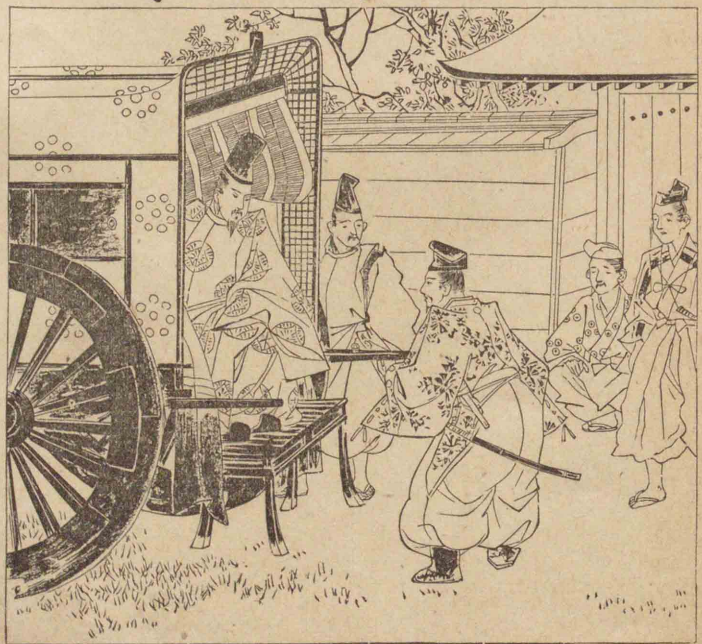
發明をしてからも、ジェンナーはいろいろとわる口をいはれましたが、ますます志をかたく

してくふうをつづけてをりました。そのうちにこの發明の事がだんだん世間にひろまり、今では我等もそのおかげをかうむつて居るのであります。

第十五 知識をひろめよ

八幡太郎義家はちまん たろう よしいへはある日よそへ行つて、いくさの話をしてゐました。おほ えのまさふさ大江匡房といふ學者がそれを聞いて、「よい武者であるが、をしいことには、いくさの學問を知らない」とひとりごと

をいひました。義家の
ともの者がそれを聞
いて、義家に告げまし
た。義家はすぐに匡房
にたのんで弟子にな
り、いくさのことを學
びました。



その後又いくさがあつて、義家が敵を攻めに
行つた時、はるかあなたの田へ、多くのがんが

下りようとして、にはかに列をみだしてとび去りました。義家は匡房から教へられたことを思ひ出し、^いがんの列がみだれるのはふく兵があるためであらう。』といつて、兵士にさがさせました。はたして大ぜいの敵がかくれてゐました。

玉ミガカザレバ光ナシ、人學バザレバ知ナシ。

第十六 迷信めいしんを避さけよ

華修四
尋修四



た。けれども目は日日悪くなるばかりでありました。

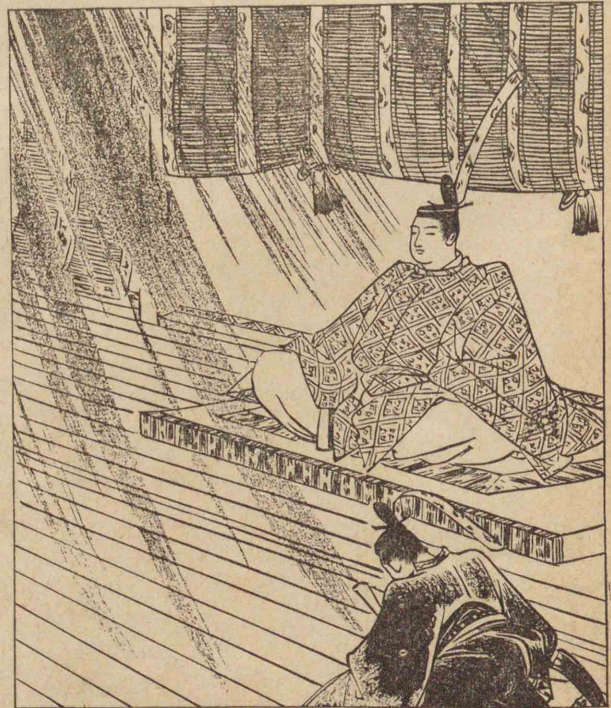
ある町に目をわづらつてゐる女がありました。迷信の深い人で、かねてある所のお水が目の病によいといふことを聞いてゐたので、それを用ひまし

ある日親類の人がみまひに来て、病氣の重い
のにおどろいて、むりに醫者の所へつれて行
つて見てもらはせました。醫者はしんさつを
して、早くお出でになつたらよかつたに、今に
なつては直すことがむづかしい」と云ひまし
た。之を聞いて病人ははじめでだうりに合は
ぬことを信じたのをこうくわいしました。

第十七 克己

後光明^{ごくわうみやう}天皇は御生れつき大そう雷が御きら

ひであらせられま
した。ある時書物を
御讀みになつて御
感じになり、雷の御
きらひなのを直さ
うとおぼ



しめされました。それで雷がはげし
く鳴つた日わざとみすの外へ出御
になり、雷のやむまでしづかにすわ



つておいでになりました。それからは雷をお
恐れあそばす御もやうがなくなりました。
自分のせいしつを直すのを克己と申します。
よい人にならうとするには克己は大切なこ
とであります。

第十八 禮儀れいぎ

人は禮儀を守らなければなりません。禮儀を
守らなければ人にいやされます。つねに言
葉づかひをていねいにし、又行儀ぎやうぎをよくしな

ければなりません。人から手紙を受けて返事
のいる時は、すみやかに返事をしなければな
りません。

人としたしくなると禮儀を忘れるやうにな
り易いが、したい中でも禮儀を守らなけれ
ば、長く仲よくつきあふことが出来ません。

第十九 生き物をあはれめ

ナイチンゲールはイギリスに生れ、小さい時



また行つて手あてをしてやりました。

からなさけ深いむ
 すめでありました。
 ある時羊かひの犬
 が足をいためて苦
 しんでゐるのを見
 て、きず口を洗ひ、ほ
 うたいをしてやり
 ました。あくる日も

それから二三日たつて、ナイチンゲールは羊
 かひの所へ行きました。犬はきずが直つたと
 見えて、羊の番をしてゐましたが、ナイチンゲ
 ールを見ると、うれしさうに尾をふつて、お禮
 をいふやうな様子をしました。

第二十 博愛

ナイチンゲールが三十四歳の頃クリミヤ戦
 争といふはげしいいくさがありました。戦が
 はげしかつた上に、悪い病氣がはやつたので、

病兵や負傷兵がたくさんに出来ましたが、醫者もかんどををする人も少いたため、大それうなんぎをしました。ナイチンゲールはそれを聞いて、大ぜいの女を引連れて戦地へ出かけ、かんどごの事に骨折りました。

戦争がすんで國へ歸りました時、ナイチンゲールはイギリスの女帝ちよていからおほめにあづかりました。又人人もその博愛の心の深いことに感心しました。

第二十一 國旗こくき

この繪は、紀元節きげんに家家で日の丸の旗を立てたのを、子供等が見て、よろこばしきうに話をしてゐる所であります。

どこの國にもその國のしるしの旗があり



ます。之を國旗と申します。日の丸の旗は我が國の國旗であります。

我が國の祝日や祭日には、學校でも家々でも國旗を立てます。その外、我が國の船が外國の港にとまる時にも之を立てます。

國旗はその國のしるしでありますから、我等日本人は日の丸の旗を大切にしなければなりません。

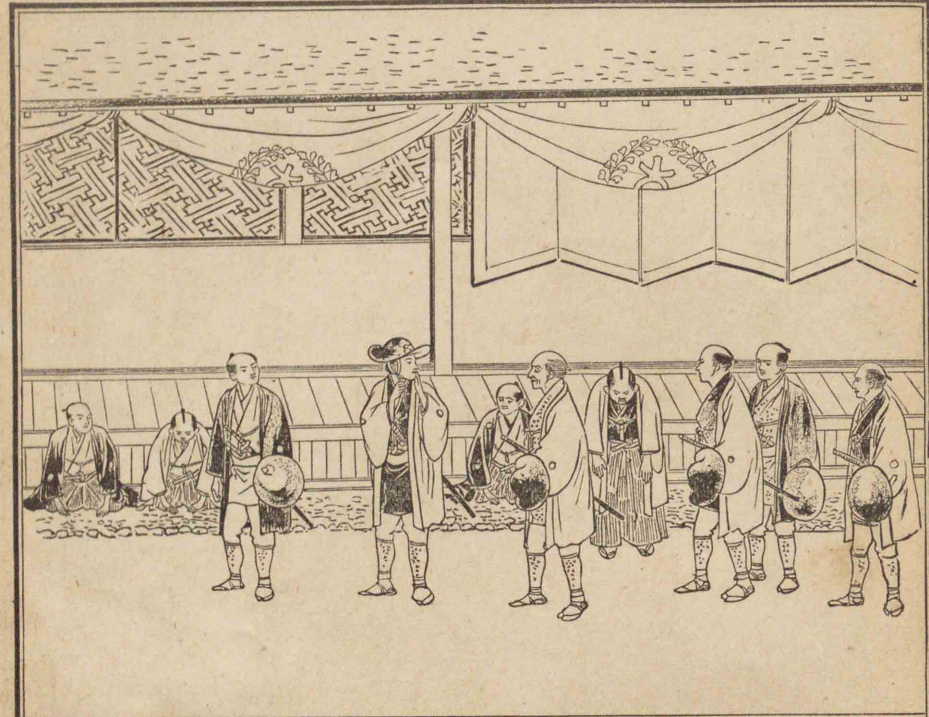
第二十二 祝日・大祭日

我が國の祝日は新年・紀元節・天長節・天長節を長節む祝の三つで、之を三大節と申します。新年は一月一日・二月五日・紀元節は二月十一日・天長節は八月三十一日・天長節祝日は十月三十一日で、いづれもめでたい日であります。大祭日は一月三日の元始祭げんし、春分の春季皇靈祭しゆんきくわうれい、四月三日の神武天皇祭、七月三十日の明治天皇祭、秋分の秋季皇靈祭しうき、十月十七日の神嘗祭かんなめ、十一月二十三日の新嘗祭にひなめであります。

祝日大祭日は大切な日で、宮中ではおごそかな御儀式があります。我等はよくその日のいはれをわきまへて、忠君愛國の心を養はなければなりません。

第二十三 法令はふれいを重んぜよ

昔ばくふの重い役人に松平定信まつだいらさだのぶといふ人がありました。或年京都へ行つて御所ごしよに参内し、槍やりなどもそこにのこしておき、よく御規則ごそくを守つて、少しも無禮なふるまひがありませんでした。又或年定信はかさをかぶつたまま根ね府川ぶがわの關所せきしよを通らうとしました。關所の役人の一人が規き則そくによつてかさを



守つて、少しも無禮なふるまひがありませんでした。又或年定信はかさをかぶつたまま根ね府川ぶがわの關所せきしよを通らうとしました。關所の役人の一人が規き則そくによつてかさを

お取り下さい。」と云ひました。定信は之を聞く
とすぐにかさを取つて通りました。其の日や
どについて後、定信は來合せてゐた小田原藩をだはらはん
の家老に「今日かさをかぶつたまま關所を通
らうとした時、一人の役人が心づけてくれた
のはまことにありがたい。其の者にあつく禮
をつたへてくれよ。」とあいさつをしました。

第二十四 公益

昔粟田定之丞くりたさだのちんげいといふ役人がありました。海岸

の村村では暴風が砂を吹飛ばして、家や田畑
をうづめることが毎度あつたので、定之丞は
之をふせがうといろいろくふうしました。先
づ海岸の風の吹く方に、わらたばを立てつら
ねて砂をふせぎ、その後うしろに、やなぎやぐみの枝
をささせました。皆めをふくやうになつてか
ら、更に松の苗木を植ゑさせましたら、次第に
大きくなつてりつぱな林になりました。
定之丞は十八年の間この事に骨折りました

が、そのために風や砂のうれへがなくなつて、
畑も多く開けました。この地方の人人は今日
までもその恩をありがたがり、定之丞のため
に栗田神社といふ社をたてて、年年のお祭を
怠りません。

第二十五 人の名譽を重んぜよ

昔伊藤東涯いとうとうがい・荻生徂徠おぎふそらいといふ二人の名高い學者
がありました。徂徠はつねに東涯のことを
ほめたりそしつたりしてゐましたが、東涯は

少しも徂徠のことをと
やかく云ひませんでし
た。

ある日東涯の弟子が徂
徠の書いた文を持つて
来て、東涯に見せました。
その場に弟子が二人居
合せましたが、之を見て
ひどくわる口を云ひま



した。東涯はしづかに二人に向つて、「めいめい考がちがつても、輕輕しくわる口を云ふものではない。ましてこの文はりつばなもので、外の人とはとても及ばないであらう。」と云つてきかせたので、弟子どもは深くはち入りました。

第二十六 人は萬物の長

人は萬物の長と申します。そのわけは、草や木は自由に動くことも出来ず、鳥や獸は動くことが出来ても、人のやうな知識がありません。

又人には良心りやうしんがあつて、善惡をわきまへ、わるい事をしようと思ふと、良心がとがめます。又人は世のため人のためになる事をするのがつとめだと知つてゐます。それゆゑ人は萬物の長と申すのであります。

萬物の長と生れたものは、徳とくををさめ、智をみがき、人の人たる道をつくさをければなりません。

第二十七 よい日本人

天皇陛下は明治天皇の御志をつがせられ、ま
 すます我が國を盛にあそばし、又我等臣民を
 御あはれみになります。我等はつねに天皇陛
 下の御恩をかうむることの深いことを思ひ、
 忠君愛國の心をはげみ、皇室を尊び、法令を重
 んじ、國旗を大切にし、祝祭日のいはれをわき
 まへて、よい日本人にならうと心がけなけれ
 ばなりません。日本人には忠義と孝行が一ば
 ん大切なつとめであります。

父母には孝行をつくし、兄弟仲よくしてたが
 ひにあらそふことなく、召使となつては主人
 を大切に思はなければなりません。
 人にまじはるには、よく禮儀を守り、他人の名
 譽を重んじ、公益に力をつくし、博愛の道につ
 とめなければなりません。
 そのほか知識をひろめ、迷信を避け、身體を丈
 夫にし、克己のならはしをつけ、志を立てて自
 立自營の道をはかり、職務には勉勵し、志を堅

くして事をしとげなければなりません。又人は萬物の長であることを忘れないで、人たる道をつくさなければなりません。

をばり

尋修四

上田キクヨ

尋常小學修身書兒童用卷四

定價金六錢

大正二年十一月十五日翻刻印刷
大正二年十一月廿八日翻刻發行

著作權所有

著作兼
發行者

文 部 省

翻刻發行
兼印刷者

大阪市南區難波芦原町千百八十八番地九

大阪書籍株式會社

代表者 三木佐助

印刷所

大阪市南區難波芦原町千百八十八番地九
大阪書籍株式會社

大正二年十一月十七日
文部省檢査濟

發賣所

東京市日本橋區新右衛門町十六番地
株式會社 國定教科書共同販賣所



広島大学図書

2000302710

